

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・一八二八

馬肉料理専門店「馬野郎」 小田嶋翼さん

西木屋町通が風俗店にまみれ「何とかして」と言った要望があり、二階建ての風俗店の一階を返還でき二分割。西木屋町通りを一新の目的で、その左店舗に私が常連の京劇の横に有った「大詔閣」を誘致、右店舗に馬肉料理店を提案。それに応募したのが当時26歳の小田嶋翼さん。

私がちりめん洋服で熊本と大分のパルコにお世話になってる時に、両店の店長にご馳走になったのが「馬の焼き肉」でした。牛と違って翌日が爽快な馬肉に大いに興味を持ち出店要請しました。彼は無資金で開店、丸3年間で開店費用を全て弁済されたのには驚きました。開店から7年目、西木屋町通は「馬野郎」と「大詔閣」の大繁盛のお蔭で、老若男女が大量に入り乱れ通行、風俗店は段々と影を薄めてゆきました。

京都国立近代美術館

11月2日〜12月15日

《円山応挙から近代京都画壇へ》

18世紀の京都において円山応挙は、実物写生の精神に基づいた写生画というジャンルを切り開きました。精緻に描かれた応挙の写生画は爆発的な人気を博し、円山派という一流派を形成しました。四条派の祖である呉春は、初め与謝蕪村に学び、蕪村没後は応挙の画風を学んだことで、応挙の写生画に蕪村の瀟洒な情趣を加味した画風を確立しました。応挙、呉春を源泉とする円山・四条派は、塩川文麟、森寛斎、幸野楳嶺等を経て、近代京都画壇を牽引した竹内栖鳳、山元春挙、上村松園等を輩出しました。

本展では応挙、呉春から近代へいたる系譜を追うことで、円山・四条派の全貌に迫るとともに、京都画壇の様相の一端を明らかにするものです。

私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

《表現者クライテリオン2019年9月号》

MMTは日本経済の救世主になれるのか？① 「財政赤字なんか膨らんでもへっちゃらで、中央銀行に紙幣を刷らせば、財源はいくらでもある」というかなりのトンデモ理論(朝日新聞原真人氏)などと揶揄されるMMT=現代貨幣理論。果たしてMMTは異端のトンデモ理論なのか？それとも日本経済をデフレから救う救世主なのか？これから数回にわたり賛否両論を紹介したい。本誌でMMT推進派である藤井聡京都大教授は「デフレの時には少なくともデフレが脱却できるまでは、累積債務の大きさを気にすることなく政府支出の拡大が必要。そうでないと国民が不幸になる」と述べMMTは正統な経済理論であり、MMTで人を見据えた経済政策を財務省から取り戻す必要性を竹内、西田両国会議員と共に述べている。

土口哲光和尚の説法

《形で甲乙はつけられない》

先の大相撲秋場所に横綱白鵬が、小ゆびの損傷で休場した。親ゆびは短くて力強い。それに比べて小ゆびの存在は見落とされる。ところが小さい小ゆびやくすりゆびがいかに大切か。ものの本によると、五本のゆびの太さ長さも同じくしてロボット手を試作したところ、案外小ゆびの働きは大きく、金槌も野球のバットも、これが効かなければダメなことがわかった。逆立ちするときも同様だという。小ゆび一本ぐらいいと思いがちだが、与えられたものは何一つ過不足はない。生活になくてはならぬものなのである。まして全身で勝負をする勝負師の大相撲の世界は小ゆび一本かけても機能しない。小さいから弱いとも悪いともいえない。形で甲乙をつけなく、各々天分に安立する。

季節の家庭料理 田村 真紀

《十一月 ぶりと木綿豆腐の揚げ出し》

〔作り方・四人分〕

ぶり四切れ・木綿豆腐一丁・片栗粉・塩・コシユウ適宜・揚げ油 ☆(だし汁二カップ・薄口しょうゆ大匙二・みりん大匙二)・大根おろし・生姜すりおろし・万能ねぎ小口切り 各適量
ぶりは一口大のそぎ切りにし、塩を振ってしばらく置き余分な水分をふき取り、軽く塩コショウする。豆腐はキッチンペーパーに包み軽く水分をふきとり、一口大に切る。ぶりと豆腐に片栗粉をまぶし、余計な粉をはたいて落とす。それぞれを170度の油で表面がこんがりするまで揚げる。☆の材料を鍋で煮立たせ、皿に盛ったぶりと豆腐の上にかける。好みで大根おろし、生姜すりおろし、ねぎの小口切りを盛る。

つれづれの記

山崎 辰巳

《ノーサイド》

4年に1度のラグビーの祭典、ワールドカップ日本大会が開かれている。世界から20チームが参加し、全四十八試合の熱戦が繰り広げられ、本稿を目にされる頃には優勝チームも決まっているかもしれない。
ラグビーは、イングランド発祥の紳士のスポーツといわれるが、楯円のボールを追いかけ、奪い合う格闘球技ともいわれている。
この競技の見所はトライであるが、スクラムから自陣の有利にボールをつないで得点を挙げる、チームワークと自己犠牲が尊ばれる競技である。そして試合終了のホイッスルと同時に「ノーサイド」を迎える。敵・味方の隔てなく、互いの健闘を称え、リスペクトする瞬間である。今どの分野でも、ノーサイドの精神が求められている。